

学びをひろげる

(第29回)

※ ○は、自分以外の参加した人の数です

まる (わたしと○人の会)

日時 2019年4月20日(土) (1時45分~5時)
場所 城東区民センター4階 小会議室3
〒536-8510 大阪市城東区中央3-5-45 TEL06-6932-2000
参加費 500円(会場費・運営費等) ※学生は、無料です。

一人で拓げられない学びを○(まる)人が集まり、多様な人たち(年齢、国籍、職種など様々な人たち)との出会い・対話を通して自分の学びを拓げ、授業づくり・教材づくりをしませんか。もう一度、教育・授業のあり方をていねいに見つめ語り合しましょう。



地下鉄 長堀鶴見緑地線・今里筋線「蒲生四丁目駅」1番・7番出口 徒歩約5分

京阪電鉄 野江駅 徒歩約8分

前回 第27回の内容

私と民族教育運動・民促協(みんそくきょう) ~在日2世の思いと日本社会 私たちは何を成し何を残したのか~
郭政義(カク・チョンイ)さん提案

話を聞きながら、退職や年齢を機に、ご自身が生きてきた在日朝鮮人としての生き方や運動をまとめ、伝えたいという、並々ならぬ覚悟を決めておられるのではないかと推察しました。例えば「何より大切にしてきたことといえば自分一人の在日ではなく一世から譲り受けた在日であり三世四世に譲り渡したい在日でもあります。独りよがりの在日であってはならないとも思っています。」といわれます。これほど大きな歴史感覚を、個人が生活化・日常化することは、日本人には到底まねることはできません。在日朝鮮人の切実な暮らしや思索が生み出した力量ではないかと思えます。郭さんはそれほど大きな「伝える」という作業をはじめられるのではないかと思いました。

提案の柱である「本名」について一日本人である私が、在日の韓国・朝鮮人の子どもたちに本名を使うことを薦めることには少々抵抗を感じてしまう。郭さんの「本名を使うことを基本にするべき」という言葉は郭さんの在日韓国人としての生き様を背景にしているから重みがあり説得力がある。私が同じ言葉を使ったとして、「じゃあ、お前はどんな生き方をしているのか?」と問い返された時に何と答えられるだろう。「本名を使う」という問題は、結果として本名を使うかどうかということより、日本人も含めた一人ひとりの生き方を問う問題なんだな、と改めて思った。(松井)

日本人大学生のIさんは、小学校に民族学級があって関心を持ち、中学校で朝文研に参加したという経験を語りました。Iさんの友人である韓国人のSさんは、日本と韓国の若者の懸け橋になりたいという目標を語りました。民族講師のYさん、民族保護者会のKさんは、普段の郭さんから聞けなかった話を知れた喜びを言いながら、もっと多くの人に聞いてほしいとの願いを語られました。他の日本人の参加者からは、子ども時代や、韓国映画を通した話、教員としての立場など、それぞれの経験を通した話が活発に交流されました。

郭さんがさらりと語る「朝鮮人に対して北風が吹くからマントをかぶっているのであって、太陽が照ればマントをかぶる必要はない」との言葉は、とても示唆的なものでした。

大阪で取り組まれてきた民族教育、在日朝鮮人教育は、決して「国際理解教育」としてひとくりにできない実践と歴史をもっています。継承して行く必要性を痛感します。



研究会のようす

今回 第28回は



部落問題学習 6年生「自分の思いや考えをありのままに出せるとは」 高野佳那さん(守口市小学校勤務)

部落問題学習で、子ども達が自分の知識と経験をもとに考えを作り、発表する授業で、話し合いが生まれるという過程を学ばせてもらいました。しかし、自由に話し合えるとはそもそもどういうことか、内容そのもの、話し合うための環境、もちろん意識してきたけれども今年は改めて深く考えさせられました。自分の学級経営も含めて。そして、まさにモヤモヤしています(笑) 今後、目指したいこともそこに尽きるかなと。――

「(内なる)差別意識に気付かせる」との「指導目標」を立てていたはずの高野さんが、子どもが立ち止り悩み考える姿を見ながら、自分自身も揺れ始めました。この経験したことのない感覚を「そんなモヤモヤこそが考え合う意味なのかもしれない。モヤモヤするから考え続けることが必然になってくる」と、絶妙の言葉で表しました。(松森)

「学びをひろげる」スタッフ 松井 直哉、 松森 俊尚

連絡先 松森 (☎090・1960・3469 ☞matumori@crux.ocn.ne.jp)

★次回第30回研究会は、2019年6月22日(土)午後1時45分~ 城東区民センター会議室にて★